筆記體 *T* 及び *F* の書順について

學習指導要領英語編 II 210 頁の Handwriting のところに例として掲載された筆記體 *T* 及び *F* について，教師間でその書順が大分問題になつているらしい。卽ち，指導要領によれば，stem を先に cap を後にしているが，正しくはこれと反對に cap が先で stem を後に書くのではないか，というのである。

大體，この問題は，教える側や日本人一般が後者の順序によつて書いている爲に斯樣な疑問を生じたように思われるのであるが，指導要領にも述べてある通り，文字の form にしても書順にしても，やはり，英語國民による方法が標準となるべきところであろう。

因みに，Handwriting では最も權威のある米國 Ohio の Zanerian College of Penmanship 校長 E. A. Lupfer 氏による *Correlated Handwriting* の Teachers' Manual を見ると，*T* の counting は，down-swing-curve-finish となつており，又他の多くの penmen が，いずれも stem から教えているところを見ると，*T*, *F* に關しては，やはり，指導要領による書順が妥當であると思われる。

日本人は，耳の病い程漢字の書順を聞かされているので，自然英字の書順についてもひどく敏感になつているらしい。然し，本場の英語國民は，彼等の文字の書順について我々の漢字の場合ほどにこだわつていないし，文字によつては漢字ほどはつきり一定した書順もない。例えば，活字體に近い Manuscript Writing の *T* にしても，前述の Zanerian によれば横線が先で縱線が後，同じ米國でも Texas の N. S. Benson & Co. から出た *Stories in Script* によると縱線を引いた後に横線を引く，という次第である。要するに，最も必要な legible な文字を，最も書き易く speedy な方法で美しく書くのが理想で，書順は自然で書き良く，速書に適するよう，人により又文字の style や connective の仕方で，多少の變化が見られるわけである。

さて，指導要領の例で，もつと問題としなければならないのは，次頁 (211 頁) の The の書きであろう。例によると，*T* と *h* を結ぶ場合，*T* の stem と *h* との connective は不正で，cap と *h* とを結ぶべきである，としているが，これは感心出來兼ねる。意圖するところは，まず *T* を正しく書順によつて完成した後に次の letter と結ぶ點にあると思われるのであるが，斯樣な順序は望ましい事ながら，この樣な場合，次の letter の form をくずしてまで連結する必要はなく，あえて一字一字を完成した後に次の letter にうつる必要もなかろうと思う。筆記で最も必要な legibility が connective によつて妨げられるのは甚だ不愉快で，一字一字を中心にするならば *T* と *h* とを結ばないようにし，connective を中心にするならば小文字 *i*, *j*, *t* の dot や cross 場合のように，stem と *h* とを結び *e* まで書き終つてから cap を附す樣にして，文字の形をゆがめ讀みにくくしないようにする事が肝要であろ

う。又不正として示された方の *The* や前頁の例文の *This*, *These* にあらわれた style の *T* の書き方についても，指導要領の執筆者はどのように考えているか一寸疑問である。この style に於ても stem を先に書いて cap に相當する曲線を後にするつもりなのであろうか。それともこの場合は曲線から書きはじめても stem と次の letter とを結んではならないというのであろうか。こうなると，この *T* の存在が餘り意味のないものになつてくるのである。この不正として上げられた書方は，英，米でも日常頻繁に行われ，英習字の手本にも載つているのであつて，書順も横の曲線から始め，字形も一層簡單で速書に適しており，stem と次の letter とを連結する事は一向に差支えなく，むしろ，その方が，速書を必要とする筆記體の理想に合致するのである。

——高橋義雄